

潮流

『デカメロン』と2021年

主席研究員 山口 勝義

ボッカッチョの『デカメロン』も、新型コロナウイルス感染症の拡大を機に改めて読み直された本のひとつなのだろう。イタリアの国民的作家と称えられる19世紀のマンゾーニは、代表作である『いなづけ』にペストが猖獗を極めた17世紀のミラノの情勢を織り込んだ。これに対して14世紀の『デカメロン』は1348年にフィレンツェを襲ったペストの流行を背景としているのであるが、ここには同市を本拠地としこの時代を生き抜いたボッカッチョの見聞が直に生かされている。『デカメロン』は、フィレンツェのサンタ・マリーア・ノヴェッラ教会で落ち合った7人の淑女が他の3人の紳士とともに郊外の別荘に疫病の難を逃れ、そこで死の影を振り払うべく、10人が10日間にわたり毎日ひとり1話ずつ、愉快に物語を語り継いでいくという趣向である。そして、このペストの惨状は、第1日目の前書きの部分に極めて写実的な筆致をもって描かれている。

これから50年ほどして、ボッカッチョの影響の下に、チョーサーが『カンタベリー物語』を完成させることになる。たまたま同じ宿に泊まり合わせた様々な身分の巡礼者たちがカンタベリー大聖堂への道中、交代で物語を語り合うというものである。英国も14世紀にペストの流行に見舞われたが、こちらは春の暖かな風に誘われたのどかな巡礼気分が主体であり、疫病の暗い雰囲気は感じられない。しかしこのような違いがあるとはいえ、『デカメロン』の特色がペストの描写に尽きるというわけではない。『デカメロン』で何より感じられるのは、作者の視点がグローバルであることである。話題はイタリア国内にとどまらず、地中海世界を中心とした欧州から、サラディンが登場するなどイスラム圏を含む広範な世界に及んでいる。若い頃、ボッカッチョは東西世界の交流の拠点であった国際都市ナポリで商業や金融業の実務経験を積んでおり、これが彼の広い視野に反映したものと捉えられている。また他にも、聖職者の腐敗を、皮肉を交えながら鋭く突くところには言論の自由が感じられ、この時代として意外感もある。さらにはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の平和共存を主張し、宗教上の寛容の重要性を強調しているところなどもその特色となっている。

このように見ると、約700年前の『デカメロン』が持つ現代性に驚かされることになる。最近の世界の論点には反グローバル機運の高まりや原理主義的な宗教テロの頻発、政権によるメディアの支配強化、人権の軽視などがあるが、ボッカッチョが取り上げた話題と多くオーバーラップしている点が印象的である。当時も東西間の盛んな交易に加え、イタリアの大商社も英王室への融資で関りを持った英仏百年戦争などの戦乱、また文化面でもダンテによるギリシャやローマの古典とキリスト教精神の融合、ボッカッチョの師でありフランスでも活躍したペトラルカによる古典文献の探索などの様々な動きがあり、決して閉ざされた停滞した世界ではない。むしろ『デカメロン』には、これからルネサンスが本格化していくイタリアの、人間解放の躍動感を感じさせるところがある。

さて、こうして全100話を語り尽くした10人の淑女と紳士たちは、連日の物語ばかりか歌やダンスで陰鬱な気分をすっかり拭き去ってフィレンツェに向けて帰路につく。翻って現代の2021年が、同様にコロナ感染症の憂いが遠のいた晴れ晴れとした年になるのかどうか。ともかくわれわれも、彼らにあやかり、より良い1年を過ごすことができるよう期待したいものである。